

## 蛙と雷神の妻になった娘

アイヌ民族の口承文芸の一つに、カムイユカラなどと呼ばれる、神様を主人公とする物語(神謡)があります。神謡の主人公とな



佐賀 彩美 (さが あやみ)

アイヌ語地名研究会

北海道出身。北海道大学法学部卒業。モントレー国際大学院(現ミドルベリー国際大学院モントレー校)通訳翻訳学科修士課程修了。北海道大学大学院農学院農学専攻博士後期課程修了。全国通訳案内士。

る神々の多くは、<sup>ひぐま</sup>熊や<sup>かえる</sup>キツネ、蛙やカラスなどなど自然界に生息する生き物たちです。神様は人間の言葉はわかりませんが、節をつけて語ると理解するのだそうです。ですから、カムイユカラは必ず節つきで語られます。語り手により節のつけかたやリズムは物語ごとに異なります。これらの節つきの語り物は、もともと神々に奉納するもので、節なしのものは、人間に語って聞かせるものといわれます。

カムイユカラを世界で初めて文字化し、日本語訳をつけ『アイヌ神謡集』として出版したのは知里幸恵さんです。昨年ご紹介しましたが、アイヌ神謡集のなかに蛙の神様の話「蛙が自らを歌った謡」が登場します。この話では、姿は人間でも実は神であるオキクルミが、炉端で彫刻している最中に1匹の蛙が悪ふざけをしたため、ついにはオキクルミにマキの燃えさしを投げつけられて死んでしまいます。しかし、身体は滅びても魂は無くならないのがアイヌの死生観です。自分の<sup>むくろ</sup>骸の耳と耳の間に座って(死んだ生き物の靈魂は骸の耳と耳の間に鎮座していると信じられている)、自身の無様な死にざまをみた蛙の神が、偉い神様に対して悪ふざけなどするのではなかったと深く悔やんだ、というのが落としどころです。

カムイユカラでは、繰り返される折節があり、それで主人公が誰なのかを連想させる仕掛けになっています。この話ではトーロロハンロク、ハンロク(to-沼 or-の中のoro-所にhan-音合わせの挿入音rok-座っている、鎮座している)という節が蛙を連想させます。道東に伝承された「雷神の妻になった娘」の神謡にも蛙が登場します。この娘は兄と姉と三人で暮らしてい

ました。食料は兄が海や山で調達し、姉が家事一切をしてくれたため、末娘は着物の刺繍ばかりして過ごしていました。竿に何段にもかけ

られた娘の作った着物は、赤、緑、黄色などの刺繍が囲炉裏の炎に照らされて虹が立っているようにみえました。とある日、村の下手で大きな雷の音がし、上手でもまたドスン、ドスンという雷の音がし、蛙が耳を塞ぎたいほど煩く鳴くので、娘は外に出てみました。外には大きな池がありましたが、その池の表面を無数の蛙が埋め尽くし、鳴き続けていました。娘が蛙を捻り潰そうとしたところ気を失い、気がつくと天上界の雷神のところにいました。この話では、ケケタトゥーヌケ(keketa-さあさあ tununke-と鳴り響く)の折節が繰り返され、娘を家から誘い出した蛙の神の鳴き声が響き渡っていることを示唆しています。雷神が言うには、花嫁候補を探していて、村の下手に大変な美人がいる。また上手のほうにもやはり大変な美人がいると聞いて行って見たが、どちらも手や口の入れ墨が不十分だったので、その中間にいた娘を嫁にすることにして連れてきたということでした。雷神も親族も娘を大切にしてくれたので、娘はそのまま雷神の妻として天上界で幸せに暮らしたといえます。

アイヌ社会では、入れ墨を入れずにいると死んでから<sup>のこざり</sup>鋸で入れられる、という話が伝承されていたほど大変重要な意味を持っていて、入れない人は当時の年配者の非難の対象となることもありました。現代日本とは正反対の扱いです。

藤村久和先生が昨年3月末に急逝されてからもう1年が過ぎました。一昨年3月、先生に「アイヌ神謡集」の講演をしていただいたとき、先生が謡われたカムイユカラの名調子に、参加者がトーロロハンロク、ハンロクと楽しく声を合わせたことが思い出されます。

.....

\*本稿は、元北日本文化研究所代表であった藤村久和先生を講師として(一社)北海道開発技術センターが自主事業として実施してきたアイヌ文化勉強会の内容を、筆者が取りまとめたものを、藤村先生に長年師事されていた花輪陽平氏に校閲いただいたものです。

藤村 久和 氏 (1940-2025) 元北海学園大学名誉教授 北日本文化研究所代表 アイヌ語地名研究会会長  
アイヌ学全般(精神文化・口承文芸・衣食住・民族医療(整体ほか)等)を研究領域とすると共に、アイヌの人々が自然を管理することなく、いかに共存してきたかについて、その思想や哲学を自ら学び・実践してきた。主な著書:『アイヌの霊の世界』(小学館、1982年)、『アイヌ、神々と生きる人々』(福武書店、1985年)、『アイヌ学の夜明け』(梅原猛氏との共編、小学館、1990年)、『アイヌのごはん』(監修、デーリイマン社、2019年)、『平成20~令和6年度アイヌ民俗文化財調査報告書アイヌ民俗技術調査1~16』(北海道教育委員会、2008~2025年)等。